

私らしく あなたらしく 一人ひとりが輝く社会へ

vol. **100**
2026.9

はあもにい

【熊本市男女共同参画情報誌】

創刊1号から100号へ——。 男女共同参画の歩みと 私たちが立つ「現在地」



○報告

男女共同参画週間記念講演会

上野千鶴子さん×山内マリコさん「だれもが自分らしく生活できるまちへ」

○はあもにい 支援グループ紹介



11.7± 10:00～16:00
11.8日 10:00～15:30

男女共同参画を推進する市民グループとはあもにいが協働で企画・運営します。講演会、バザー、クイズなど楽しい催しがたくさん(一部有料)！ぜひお越しください

11/7± 記念講演会

天草から世界へ ～多様な生き方と物語の魅力～

講師：漫画家 **高浜 寛氏**

天草で生まれ、世界を舞台にした漫画を描く高浜寛さん。その作品には、時代や文化、立場の違いを超えて、自分の思いを大切に生きる人々の姿が描かれています。「自分らしく生きる」とはどういうことなのか。高浜さんの歩みと物語から、私たちの生き方について考えてみませんか。



Photo Pierre Hybré_Leed

日時 11月7日(土) 13:30～15:00 (開場13:00)
会場 はあもにいメインホール
定員 350人(先着順) **費用** 無料
託児 あり(1歳～未就学児、要予約)
申込 10月5日(月)午前9時から電話または申込フォーム(HPにもあり)から、要予約。
※手話通訳あり

申込フォーム▶



11/8日 映画上映会

【第1部】たべっ子どうぶつ THE MOVIE

1978年の発売以来、愛され続ける国民的おかし「たべっ子どうぶつ」が映画化！お馴染みのどうぶつたちがアニメーションとなって映画で大暴れ！

日時 11月8日(日) 10:30～12:00(開場10:00)
会場 はあもにいメインホール
定員 350人(先着順) **費用** 無料



【第2部】SILENT FALLOUT

米国が行った核実験から子どもを守ろうと立ち上がった女性たちは、やがて社会を動かし、核実験の中止へつながります。知られざる彼女たちの社会を変えていく力を描いたドキュメンタリー映画です。監督・伊藤英朗氏のアフタートークも開催。

日時 11月8日(日) 13:30～15:20(開場13:00)
会場 はあもにいメインホール
定員 350人(先着順) **費用** 無料
託児 あり(1歳～未就学児、要予約)



申込 10月5日(月)午前9時から電話、申込フォーム(HPにもあり)にて事前申込優先(当日参加もOK)

申し込み・問い合わせは 熊本市男女共同参画センターはあもにい(中央区黒髪3-3-10)

☎096-345-2550 (9:00～19:00、休館日：第2・4月曜 祝日の場合は翌平日) ホームページ<https://harmony-mimosa.org/>

7月28日に発生した「令和8年熊本地震」により被災された皆さまに、心よりお見舞い申し上げます。

被災された皆様の安全と、一日も早い復旧・復興をお祈りいたします。

支援を必要とされている皆さまへ生活再建のための支援制度を熊本市ホームページにてご案内しています。



HP

【女性に対する暴力をなくす運動週間】

11月12日から25日は「女性に対する暴力をなくす運動」週間です。配偶者や交際相手などからの暴力は重大な人権侵害であり、決して許されるものではありません。熊本市では期間中、熊本城やサクラマチクマモトを紫色にライトアップし、暴力根絶への願いを発信します。あわせて、くまもと森都心プラザではパープルツリーのライトアップも実施されます。ひとりで悩まず、困ったときは相談窓口をご利用ください。



詳しくは
熊本市HPへ



男女共同参画課相談室

男女共同参画課相談室では専門の相談員がご相談を受け付けています。一人で悩まずに、まずはお電話ください。相談は無料です。詳しくは二次元コードから市ホームページをご覧ください。

詳しくは
コチラ

DV相談 専門相談



発行者

編集・発行 〒860-8601 熊本市中央区手取本町1-1 熊本市文化市民局人権推進部男女共同参画課
〒860-0862 熊本市中央区黒髪3-3-10 熊本市男女共同参画センターはあもにい
市民編集員 江口 香奈美 吉田 悦子 中川 恵美子

▶ご意見・ご感想をお寄せください

◎熊本市男女共同参画センターはあもにい

✉info@harmony-mimosa.org ☎096-345-2550 9時～19時

熊本市男女共同参画センターはあもにいの詳しい情報はこちらから

はあもにい 熊本

検索



市民約300人の声から見える 男女共同参画の今

男女共同参画について、市民の皆さんに率直な意見や課題を尋ねました。

※熊本市公式LINEによるWEBアンケートを実施(7/27～8/7、回答数288)

Q2 男女共同参画が「まだ十分に 進んでいない」と感じるのは、 どの場所・分野ですか？

※WEB 回答と、7/25 にはあもにい口ビーで実施したシール投票を合わせた集計。複数回答。

- 1.政治……………(256人)
- 2.職場……………(235人)
- 3.家庭……………(221人)
- 4.地域活動……………(123人)
- 5.防災・災害対応……………(93人)
- 6.教育……………(92人)



Q3 「まだまだ」と感じる、 その理由は？

女性・60代

女性の政治家がもっと増えて、高齢議員が後進に譲り、若い女性の立場からの意見をどしどし言ってほしい。

その他・10代

よく親戚などから「女の子なんだから行儀よくしなさい」「女の子は家事を手伝いなさい」と言われる。

男性・40代

育休だけでなく体調不良の際も、男性職員よりも女性職員の方が有休を取りやすい傾向があります。

女性・50代

夫はゴミ捨て。でもゴミをまとめるのは私。洗濯も、たたむのは私。夫は家のことを相手がやっているとっています。不思議です。

男性・70代

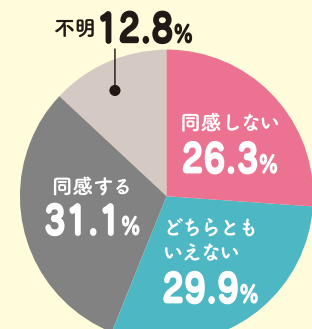
役員決めの際、女性からの「役員は男性にしてもらいましょう」の意見。その結果、会員は女性が多いのに役員は男性ばかりになってしまうこと。

1987年は同感しない人が26.3%にとどまり、性別による役割分担が根強く残っていました。今回は「同感しない(70.5%)」「同感する(3.1%)」を大きく上回りました。

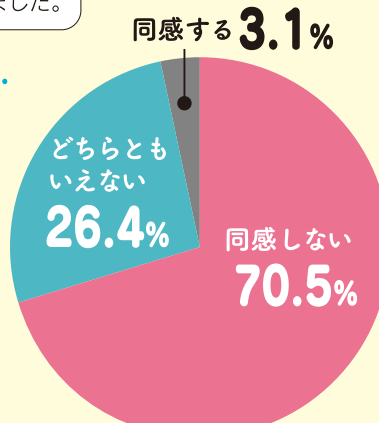


Q1 「男は仕事、女は家庭」という 考え方について、あなたはど う思いますか？

創刊号(1987年調査)では…



※1987年調査と今回のアンケートでは、調査方法および回答者数が異なるため、数値は傾向の比較としてご覧ください。



【若い世代・職場で進む変化と課題】

未来を担う「高校生」と、働く現場である「企業」のリアルな声を聞くため、市立必由館高校と鶴屋百貨店に取材しました。

世代で意識の変化——必由館高校

「男は仕事、女は家庭」という考え方には「同感しない」という声が増えました。共働き家庭の増加に伴い、父親が料理や弁当作りをする家庭も多く、性別で役割を分ける感覚は確実に薄れています。学校生活でも、女子が生徒会長や副会長を務めることは、ごく自然な光景です。一方で、力仕事などで男子だけが頼まれると「私もできるのに」と違和感を覚えるという声もありました。政治や企業の管理職、地域役員など「意思決定の場」に男性が多い現状にも、鋭い視線を向けているようです。

性別やLGBTQ+などにかかわらず、誰もが正當に評価される社会へ。「生きやすさ」ではなく「当たり前」の社会に」という言葉に象徴されるように、10代の若者たちは柔軟な価値観を持ちながら、社会に残る違和感を見つめています。

働く女性の声で環境・制度が変わる——鶴屋百貨店

女性従業員が多い鶴屋百貨店では、約11年前に開設した社内保育園を現在2園運営し、女性の産休・育休取得率および復帰率は100%を達成しています。

時短勤務は小学4年生まで利用でき、勤務時間を選択可能。「子どもが熱を出したときは早く帰って」と声を掛け合うなど、互いに支え合う風土も定着しています。

一方で、管理職は男性が多い状況にあります。時短勤務中でも管理職に挑戦できる仕組みを整えるなど、女性がキャリアをあきらめずに働き続けられる環境づくりも進められています。こうした取り組みが、熊本の企業にさらに広がっていくことが期待されます。



アンケートや高校生の声が示すように「男だから・女だから」ととられない感覚は確実に広がっています。一方で、家庭での家事負担や職場の風土など、今もジェンダーの壁が残っています。企業の現場でも、制度だけでなく「周りの空気」を変える大切さがうかがえました。個人の意識の変化を社会の改革へとつなげるか、私たちが取り巻く環境や社会の仕組みに働きかけるかが、これからの課題です。

創刊1号から100号へ——。

男女共同参画の歩みと 私たちが立つ「現在地」

女性の社会進出やジェンダー、LGBTQ+、男性の育児休業など、この数十年で男女共同参画をめぐる制度や言葉は大きく広がりました。暮らしが変化したとを感じる一方で、変わらない生きづらさを感じる場面もあります。『はあもにい』創刊100号を迎えた今、これまでの歩みを振り返り、私たちが立つ「現在地」を見つめ直します。



38年の歩みと、市民の声から 見えてきた「リアル」

男女雇用機会均等法の施行(1985年)を背景に、女性の社会進出や発言力が高まった1980年代後半。熊本市では87年に女性に関する施策を総合的に企画する「婦人生活課」が設置され、翌88年、課題解決に向けた参加と連携の指針として本誌『はあもにい』が創刊されました。創刊号で市民に問いかけた「男は仕事、女は家庭」という価値観は、現代では見直され、制度や働き方の面で着実な変化が生まれています。

しかし今回、あらためて実施した市民アンケートや取材からは、いまなお残る課題が浮き彫りになりました。職場や家庭での性別役割分担に対するモヤモヤや、政治・意思決定の場における女性参画の遅れなど「十分に進んでいない」と感じるリアルな声も寄せられています。

一方で、未来を担う高校生たちの柔軟な視点や、多様性を強みに変えようと動き出した企業の挑戦など、意識の改革と社会制度の改革の芽も着実に育っています。「生の声」から見えてきた熊本の現在地とこれからの道筋を考えます。



多様な社会はなぜ難しいかー日本の「ダイバーシティ進化論」

水無田気流／著
日経BPM
(日本経済新聞出版本部)／発行

「当たり前」を立ち止まって考え直すきっかけに

「多様性は大切」と誰もが口にする一方で、なぜ社会はなかなか変わらないのでしょうか。本書は男性の育児休業、働き方、結婚、家事・育児、LGBTQ+など、私たちの日常に身近な話題から、日本にダイバーシティが根づきにくい理由を読み解きます。女性だけの問題として捉えるのではなく、仕事一辺倒になりやすく家庭や地域に居場所を持ちにくい男性の生きづらさにも光を当てている点が特徴です。男女共同参画とは、誰かの権利を奪うことではなく、性別によって決められてきた役割から、誰もが少し自由になること。職場や家庭で「当たり前」としてきたことを、一度立ち止まって考えるきっかけになる一冊です。

※紹介した本は、はあもにい1階情報資料室で貸し出しできます。

はあもにい
情報資料室

おすすめ図書



データから読む 都道府県別ジェンダー・ギャップ あなたのまちの男女平等度は？

共同通信社会部ジェンダー取材班／編
岩波書店／発行

地域の未来を考えるため男性にも届いてほしい本

あなたの住むまちは男性にも、女性にも、同じように可能性が開かれているのでしょうか。本書は47都道府県の男女平等度を、政治・行政・教育・経済の4分野からデータで可視化しています。全国順位だけでなく、地域ごとに強みと課題が大きく異なる点にも注目です。女性管理職の割合、議会への参画、働き方や賃金など、数字を通して見ると身近な暮らしと地域の未来が繋がっていることに気付かされます。ジェンダー平等は女性だけのテーマではありません。人材不足や地域経済、子育て、若者の定着にも関わる地域づくりの課題です。熊本の現在地を知り次の一步を考えるために、男性にもぜひ手に取ってほしい一冊です。

38年経ってもなぜ？

「変わらない」の裏にあるボトルネック



話を聞いたのは

熊本大学名誉教授 鈴木 桂樹氏

意識啓発と制度改革「両輪」の動きが今こそ必要

社会が「なかなか変わらない」原因を突き詰めると、「社会制度に染み込んだ性別役割意識」に突き当たります。「染み込んだ」というのが一番の課題です。

今回のアンケートや取材では、「男は仕事、女は家庭」という考えに「同感しない」人が多数派でした。しかし現実には、家庭で夕食を作るのは今も圧倒的に女性が多いのが現状です。

この「意識」と「行動」のギャップに潜んでいるのが「無意識の思い込み(アンコンシャス・バイアス)」です。まずは一人一人が自分の中の無意識に気付くことが欠かせません。

ただし、人々の意識を変えるだけでは社会制度は自動的に変わりません。「男は仕事、女は家庭」を前提とした働き方の

もとは、女性の労働は長年「家計の補助」とみなされ、非正規や低賃金が「当たり前」とされてきました。

一度こうした賃金格差が当たり前になってしまつと、家事や育児を女性が担うことは意識の問題というよりも世帯全体の収入を最大化するための現実的な選択「になつてしまします。そして性別役割の意識を補強するという悪循環を生んでいます。

「意識を変えましょう」という呼びかけだけでは世の中は変わりません。「意識の革新」と「社会制度の革新」は車の両輪です。政治や企業の意思決定の場にジェンダーの視点を持った人材をどれだけ増やしていけるかが、今まさに問われています。

※ボトルネックとは…物事が進みにくくなる「詰まり(制約)」のこと。



100号記念！「はあもにい」表紙プレイバック

38年にわたって発行されてきた「情報誌はあもにい」。その表紙を並べると、デザインだけでなく時代や人々の意識の変化も見えてきます。

【1992年8号】

寄り添う男女が描かれており、当時の男女のイメージや時代の空気を映し出しています。



【2007年54号】

時代が進み、男女が中心だったものが、家族の姿や男性が家事をする様子なども描かれるようになりました。



【2025年98号】

特定の「男性像」「女性像」だけではなく、さまざまな立場や背景を持つ人たちが表現されるようになりました。



1988年の創刊号から2026年の100号まで、描かれる「人」や「暮らし」の姿も少しずつ変わってきました。表紙は、その時代を映す小さな鏡なのかもしれません。これからも、その時代に生きる人々の声や社会の変化を映しながら、皆さんと一緒に歩んでいきます。

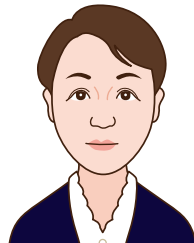


編集後記



江口 香奈美 編集員

38年間で100号。そのうち半分ほどを手にとってきた身として、変わったことと、変わらない(変わらない)ことが入組んだ、さながら市松模様の様相に目が眩むようでした。オセロのように一気に白くひっくり返すわけにはいかず、地道に一枚ずつ、でしょう。今号の必由館高校や鶴屋百貨店の取材記事には希望が感じられました。上野さんと山内さんの講演は熊本のリアルを解像度高く浮かび上がらせるものでした。市民編集員として関わる幸せと責任を噛み締めつつ、さまざまなアンテナを張って生活していきたいです。



吉田 悦子 編集員

『はあもにい』100号のタイミングで、編集員として初めて参加しました。企業の取り組みの他、高校生や市民の意見を通じて、多様な課題が見えてきました。時代は大きく変わり、多様化が進む一方で、まだ道半ばと感じる部分もあります。企業取材を通して、男女共同参画の模範となる取り組みや、働き方など参考にすべき点があることを理解しました。これまでの歩みと少しずつ進む社会の変化を改めて実感し、今後も共に取り組んでいきたいと思っています。



中川 恵美子 編集員

『はあもにい』100号という節目に、市民編集員として携われたことをうれしく思います。創刊から38年、誌面を振り返ると、社会や暮らしの変化と多様な声を伝えてきた歩みが見えてきました。一方、アンケートや取材からは、意識が変わっても制度や慣習には課題が残る「現在地」も浮かび上がりました。この100号が、家庭や職場、地域の「当たり前」を見つめ直し、「意識の革新」と「社会制度の革新」の両輪を止まることなく動かし続ける必要性を考えるきっかけとなれば幸いです。

一歩を踏み出した修了生も多数! はあもにいウィメンズカレッジ



講座の様子

自らの考えを発信し、地域や職場で活躍する女性人材の発掘・育成を目的とした「はあもにいウィメンズカレッジ」。13期目となる今年度は、職種・年代もさまざまな女性21名が参加しています。

8月29日(土)、第4回講座を開催し、認定NPO法人DPI(障害者インターナショナル)日本会議議長・平野みどりさんを講師に迎えました。多様性が尊重される社会のあり方などを学び、受講生は自身の「当たり前」を見直すき

っかけになりました。月1回、女性の人権や地域防災などについて受講し、11月の修了式では学びや気づきを一人一人発表します。

2027年4月から14期の受講生を募集。学びをきっかけに、市議会議員として活躍したり、男女共同参画に関する活動を行ったりしている修了生もいます。新たなつながりが生まれ、それぞれの地域や分野での活動へと広がっています。ぜひチェックしてみてください。

※詳細は2027年3月頃、HPにて公開予定

はあもにい 支援グループ紹介

①活動の頻度や活動状況 ②連絡先 ③読者に一言

くまもとジェンダー Bridge

「娘として育ち、妻になり、母になり…なんとなく苦しかったけど、ジェンダーを知ったら生きやすくなった!」そんな経験から生まれた団体です。日常のモヤモヤを気軽に話せるカフェなどを開催し、身近なジェンダー問題に気付くきっかけを作っています。目標は、一人一人が自分らしく幸せに生きられる社会への架け橋になることです。

① 年に数回、はあもにい学習室で「ジェンダーカフェ」を開催。定例会は1~2カ月に1回(オンラインまたははあもにいにて)。

② インスタグラム: @kumamoto.gender.bridge
✉ kumamoto.gender.bridge@gmail.com

③ ウィメンズカレッジの受講生同士で結成しました。「ジェンダーってなんだろう?」詳しくなくても大丈夫。ぜひ一緒に話しましょう。メンバーも募集中です!



Instagram

くまもと健やか家庭サポートチーム

パートナーシップの構築と男女共に自己実現できる社会を目指し、「家族の会話のキッカケ」となる体験型イベントを不定期で開催するボランティア団体です。「お互いを理解するための日常の会話」を大切に、父子で参加できる講座や家での会話につながる工夫を取り入れた企画を運営しています。子育て中のメンバー自身も「できるしこ(無理のない範囲)」を合言葉に、月1回のオンラインミーティングで近況を共有しながら活動が続けています。

① 毎月第1月曜にオンラインでミーティングを開催。不定期でイベントを開催しています。

② ✉ info.ksks.3@gmail.com

③ 現在メンバーを募集中です!



HP

あらいぐま人吉

豪雨災害などで水に浸かった写真をきれいに洗って持ち主に返却するボランティア団体です。写真は単なる記録ではなく、家族の歴史や大切な人生の思い出。被災された方からは「捨てるしかないと思っていた写真がきれいになって戻った」と喜びの声をいただきます。私たちは、写真をきれいにするだけでなく、人と人とのつながりを育みながら被災された方の心に寄り添うことで、誰もが支え合える地域づくりに貢献したいと考えています。

① 月に2回程度(主に日曜)、はあもにいや熊本市南区の拠点で活動しています。参加メンバーは女性を中心に、学生や社会人、シニアなど、幅広い世代の多様な立場の人です。

② ✉ arajin2021@gmail.com

③ 参加メンバー募集中。あなたの少しの時間が、被災された方の大切な思い出を取り戻す力になります。



HP

Free Lady Talk

「一人で考えていると、前に進めない、不安ばかり大きくなる」。そんな経験はありませんか? フリーレディートーク(通称フレット)は、熊本の女性が自由に語り合い、新しい学びや出会いを通して、自分らしい未来を見つけるコミュニティです。同じ想いの仲間と話すことで、悩みが軽くなり、次の一歩を踏み出す勇気が生まれます。未来へ向かう小さな一歩につながる、前向きな学びと交流の場を提供しています。

① 月1回ははあもにいやバレアで講座を開催。マルシェやカフェの運営もしています!

② インスタグラム: @free_lady_talk
✉ freeladytalk24@gmail.com

③ ぜひお気軽にご参加ください! 待っています!



Instagram

令和8年度熊本市主催事業 報告

男女共同参画週間記念講演会

上野千鶴子さん×山内マリコさん

だれもが自分らしく生活できるまちへ

6月23日から29日は、男女共同参画社会基本法の理念を広く知ってもらうための「男女共同参画週間」です。毎年、熊本市・熊本県弁護士会と共催で記念事業を実施しています。今年は7月25日(土)に社会学者の上野千鶴子さんと小説家の山内マリコさんの講演会を行いました。共著『地方女子たちの選択』でも知られる二人が、進行の塚本薫さん(株式会社きらり、コーポレーション代表)と共に、データと実体験から地方都市・熊本の現状と未来を鋭く、時にユーモアを交えて語り合いました。



社会学者・東京大学名誉教授
上野 千鶴子さん

専門は女性学、ジェンダー研究。この分野のパイオニアであり、指導的な理論家の一人。高齢者の介護とケアも研究テーマとしている。『近代家族の成立と終焉』(岩波現代文庫)、『おひとりさまの老後』(文春文庫)、『最期まで在宅おひとりさまで機嫌よく』(中央公論新社)、『非婚ですが、それが何か!?』(水無田気流氏との対談、ビジネス社)、など著書多数。

小説家
山内 マリコさん

2008年に「女による女のためのR-18文学賞」読者賞を受賞後、12年「ここは退屈迎えに来て」でデビュー。地方都市の閉塞(へいそく)感や女性の日常、友情などをテーマに執筆。『アズミ・ハルコは行方不明』『あのこは貴族』など、映画化された作品も多く、幅広い世代から支持を得ている。富山県出身で上野氏との共著である『地方女子たちの選択』(桂書房)も話題を呼んでいる。

講演会には、2日前に目の手術をした上野さんと、前夜に目が腫れたという山内さんが眼帯姿で登壇。「地方を出ていった女」「戻らなかった女」としての経験を踏まえながら、地方で暮らす女性を取り巻く現状について語り合いました。

データから見えてくる熊本の「生きづらさ」

熊本県の女性の賃金格差は全国ワースト5位、共働き世帯の家事・育児時間は女性が男性の5倍以上で全国ワースト3位という厳しいデータが示されました。上野さんは、妻の就労形態にかかわらず夫の家事時間が少ない日本の現状を「新・性別役割分担(男は仕事、女は仕事+家事育児)」と表現。さらに、女性にのみ「子育てがあるから早く帰って」と促す職場の対応を「配慮という名の差別」と指摘しました。

地元にとどまる若者、離れる若者

若者が地元にとどまる背景には「家族の期待」「経済的事情」「娘は遠くに行かなくていい」という価値観や、地元就職との結びつきがあります。親からは「介護要員として近くにいるほしい」という期待も少なくなく、上野さんは娘に県外へ出ないよう言う親は、娘の翼をもいでいる」という厳しい言葉を引きつつ、一人一人が自らの人生を主体的に選択することの重要性を強調しました。山内さんは地方を離れる理由に「相互監視の文化」を挙げました。「結婚は?」「子どもは?」と悪気なく問われる「マイクロアグレッション(微細な攻撃)」の積み重ねが「地方

★編集員も参加しました!

さまざまな理由で地方を出て行く男女。若者の県外流出は、熊本だけの問題ではありません。時代と共にまだまだ課題が残ると知られる講演会でした。地方土壌に価値観や考え方を直す機会だと思いました。

市民編集員 吉田悦子さん

市民編集員 江口香奈美さん

女性の県外流出は、女性だけの問題ではありません。誰もが「こうあるべき」という役割や周囲の目に縛られ、生きづらさを感じているのではないのでしょうか。最後に塚本さんは「帰りたくなるまちにしていこう」と提起し、これからの世代に向けて私たちができることは何か、一人一人が考えていくことを呼びかけました。



最後は笑顔で手を取り合う3人。温かい拍手で締めくくられました